

## 「小さな百姓」養成塾 里山技塾

能勢なつかしさ推進協議会 里山技塾運営担当

伊藤 雄大 様

### 里山の風景や恵みは誰かの手によって守られてきた

私は以前農山漁村文化協会という、農業関係の出版社で働いていました。そこで『現代農業』という雑誌を編集していて、たくさんの農家の方々に会いました。それで農家についてもものすごく勉強させてもらいました。そういう今までの経験と、能勢に来てから体験したことを、これからご紹介する里山技塾に詰め込んでいます。

能勢なつかしさ推進協議会は2018年に発足した、町内の飲食の事業者や自治会などで構成されている非営利の組織です。国の補助金をいただいて、地域資源を生かした観光プログラムや教育プログラムの開発を行ってきました。その一方で能勢の里山の風景というのは住民の方々がこれまでの労働や技術の伝承を積み重ねてきたことの賜物だと私は考えるようになりました。つまり、観光を盛り上げるだけで、この基盤を放っておくと、観光資源自体がなくなってしまうのではないかと、いうところに、危機感を感じるようになりました。

そこで里山技塾というのを2020年に始めました。ここでは3つ大事なことがあると主張しています。まず「里山の風景や恵みは誰かの手によって守られてきた」ということです。里山での生活は、そこで働く人が健康的に保ってこそ成立するものだと思います。もちろん、高付加価値とか、ブランディングだとか、そういう取り組みもいいのですが、それと並行して必ずしなくてはならないのが、実際に手を動かす担い手を育てることだと思います。2つ目が、「農村は副業の宝庫である」ということです。能勢町に限らず、昔の農村は、ほとんどの人が兼業農家で、農閑期に農業以外の副業をしていました。そういう視点でみると、農村にはたくさん副業があるものです。住んでいる人は、「能勢には仕事がない」というふうに言いますが、副業はたくさんあるということです。3つ目が「潜在的担い手を発掘して、小さな百姓集団をつくり、課題解決に取り組む」ということです。潜在的担い手というのは、これまでは担い手として認識されていなかった、自営業者や定年退職者、学生、家事手伝い等々、里山の仕事を副業として仕事にできるような人たちです。こういう人たちに里山資源を上手に活用する技術を身につけてもらって、小さな百姓になってもらおうというのが、里山技塾のテーマになっています。

### 小さな百姓の利点と役割

一般的な農業の担い手のイメージは、大規模集約型ですね。元気な若手農家がバリバリやるとか、農外企業が参入するとかいうことだと思います。里山技塾では小規模拡散型というのを想定しています。小さな百姓ですね。副業として農業や手仕事を取り入れる人というイメージです。その場合はハードルがものすごく低くて、初期投資も少ないし、初めは素人でもいいのです。誰もが潜在的担い手で、小さな百姓になれる可能性があるというふうに考えています。大規模集約型がダメだと

言っているわけではありません。この2つが協力して村をつくっていくというのが、本来のあり方ではないかと思っています。

それでは小さな百姓の役割についてお話しします。効率を重視する大きな農家が持て余す耕作放棄地というのがあります。小さな百姓は効率だけではなく楽しみという価値もあるので、そういうところを補う存在として彼らが活躍できるのではないかと思っています。そこで住む限り、農業



だけではなくて、住民として自治活動へ参加します。たとえば消防団も弱体化しているところがありますので、そこで活躍できると思っています。副業の農業が、本業にもいい影響をもたらす場合もあります。たとえば、農業と本業のつながる部分を生かして、新しい本業のかたちをつくったり、逆に本業の知恵を農業に生かしたりと、いろんなことができるようになると思います。卒業生同士にもつながりがあって、行く行くは援農隊を結成して、高齢農家のサポートをしたり、お互いにもうまいかないところを支援しあったりしてはどうかと思っています。

### 里山技塾の講座について

里山技塾の講座と取り組みについてご紹介します。

#### 1. 里山を守る講座

①西田流 栗接ぎ木・剪定術（現在第2期） 講師：西田彦次氏（栗農家）

詳細は後述する。

②未来のビーキーパー講座（終了） 講師：和田隆氏（養蜂家）

2日間という短期の座学講座として試験的にやってみた養蜂講座。能勢在住の養蜂家が、自分の後継者を育てたいということで、いわば弟子募集を受託するようなかたちでイベント化した。現在5人のビーキーパー候補生が活動しており、良い結果が出たと思っている。

③いまこそ、山と向き合う時（翌年開講予定） 講師：未定

林業の企画であるが、プロの林家を育てるというよりは、山持ちの住民向けに自分の山をなんとかしたいという需要に応えるため、間伐をしたり、山にある資源をどうにかして売り物にしたりする企画。

#### 2. 地域農業を盛り上げる講座

①直売所名人になる！（翌年開講予定） 講師：能勢観光物産センター出荷者

直売所は兼業農家の主要な出荷先であるが、高齢農家が少しずつやめていかれているなか、世代交代をなんとかしたいという思いがある。

#### 3. 卒業生有志による援農事業

元気な高齢者の農家でも、草刈りが大変だったり、高いところに登るのを家族が心配して止められたりするという悩みがある。高齢農家が農業を続けられるように、卒業生有志で手伝えないかという企画。卒業生の中でも農地を持たない人もいるので、そういう人の活躍の場を提供したい。

里山技塾の授業の特徴として、講師は農家などの地元住民というふうに決めています。具体的な

授業をすることと、未経験者を即戦力の人材に育てるということです。2つ目が、現地のフィールドで、観察して、現物に触って勉強することです。3つ目が、YouTubeなどにアーカイブを残して学習資材を蓄積することです。家に帰ったあとでも復習できるようにということです。4つ目が、あくまで小さな百姓向けということで、家庭菜園のスキルアップ講座ではないということを明言しています。

### 西田流栗接ぎ木・剪定術

今行っている西田流栗接ぎ木・剪定術について説明します。毎月第4火曜日の開催で全10回、参加費は3万5000円と、普通の農業講座よりも少し高いと思いますが、講師の方にもちゃんとした謝礼を払いたいということと、長く続けられるようにこういう値段を設定しています。1期と2期、合計の受講者が約40名です。専業農家や兼業農家、飲食店経営、自営業者、定年退職した人、シルバー人材センターの人、有給を取って来る会社員の人、家事をしておられるお母さん方も来ています。1ha程度の放置栗園を復活したというのが実績です。また受講生の方が勉強するなかで「こんな栽培がある」というのを共有してくれたり、新品種を試験的に栽培してみたりという波及効果があります。農家が講師をするのがすごくいいことだと思っている理由は、教科書的には全部が大事というふうに書いてあるのです。つまり強弱がないのです。しかし、農家が実際に自分でやっていることを話すので、「ここが大事で、ここが力の入れどころ」ということが学べるため、効率的ではないかと思います。難しいものと思っていた接ぎ木や剪定ができるようになると、自信がつかます。「意外とできる」と思うようになれば、そこからはおそらく自分で農家になるための努力や勉強をするような人になると、私は思っています。卒業したあるサラリーマンの方は、副業だからこそできる大胆な挑戦として、悪条件の畑でも栗栽培ができるというひとつの例をつくりたいということで、励んでおられます。能勢でレストランを運営されている方は、自分でも畑を持って自分の野菜をレストランで提供するようになりました。里山技塾の卒業生が、いろんなところで活躍できたらと願っています。

### 農業は料理みたいなものだ

最後に、もうちょっと農業を楽に考えてほしいという意味で、私がいちばん尊敬する編集部時代の編集長が言った言葉が心に残っています。みなさんに「自分でもできるんじゃないかな」というふうにしてほしくて、紹介します。曰く、「農業は料理みたいなものだ。料理をつくるのと一緒で、誰もが当たり前やること、やらなければならないこと。プロの料理人になりたいという人もいたら、冷蔵庫にあるものだけで適当につくりたい人もいるし、採算度外視しても最高の料理をつくりたい人もいる」。儲けた農家だとか、自然栽培の農家だとか、それだけがメディアで取り沙汰されていますけれども、この塾を通していろんなかたちがあることを伝えたいと思っています。みなさんもよろしければ、来年里山技塾に来ていただけたら幸いです。

---

■このレターは、9月7日に開催いたしました第24回 UII まちづくりフォーラムの内容を要約したものです。

---

発行元・問合せ先 公益財団法人都市活力研究所  
〒530-0011 大阪市北区大深町3番1号  
グランフロント大阪 ナレッジキャピタル タワーC 7F  
TEL 06-6359-1322/FAX 06-6359-1329